

機関番号:64401

研究種目:基盤研究(C)

研究期間:2008~2010

課題番号:20520721

研究課題名(和文) 変動するタイ社会におけるコミュニティ博物館の人類学的研究

研究課題名(英文) An Anthropological Study of Community Museums in Thai Society

研究代表者

平井 京之介(KYONOSUKE HIRAI)

国立民族学博物館・民族文化研究部・准教授

研究者番号:80290922

研究成果の概要(和文):本研究は、タイ国内に1,000程度あるといわれる小規模のコミュニティ博物館の実態と、近年にみられるその変容過程を明らかにすることを目的としている。合計5カ月にわたる現地調査と収集した文献資料の分析により、これらの博物館の多くは、90年代以降、タイの各地でみられる地域文化復興運動と連動して発展したものであり、地域の価値観やアイデンティティの醸成に大きな役割を果たしていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文):The purpose of this research is to examine the conditions and possibilities of small local museums in changing Thai society. By having conducted five months fieldwork and the literature survey, the research found out that most of the museums have developed since 1990s in association with the local movements of cultural revival, so that they have played a major role in expressing values and identities that local communities newly value.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野:人文学

科研費の分科・細目:文化人類学・民族学

キーワード:文化人類学、民族学、博物館、地域研究、コミュニティ、上座部仏教、タイ、文化復興運動

## 1. 研究開始当初の背景

1980年代、人文諸科学の分野で知識の政治性をめぐる議論が活発化し、その影響のもとに、「新しい博物館学(The New Museology)」が開示された(P. Vergo(ed.), The New Museology. Reaktion Books 1989)。これは博物館活動の背後にある概念的基礎や仮定を批判的に検証しようとするものであり、一方で、特定の知識やアイデンティティを正当化する博物館の機能がさかんに議論され、他

方で、コミュニティ開発における博物館の役割と可能性が注目されるようになった(I. Karp, C. Kremer, S. Lavine(eds), Museums and Communities. Smithsonian Institution 1992)。C. Krepsは、批判理論に基づく博物館の人類学的研究を進め、インドネシア等での経験から、非西欧社会にも土着の博物館モデルがあることを指摘し、西洋中心主義的な博物館学のイデオロギー作用を批判した(Liberating Culture. Routledge,

2003)。こうした研究動向に対応して、国内でも博物館の政治性に関する理論的な研究が進展するとともに、博物館人類学における具体的な分析も見られるようになった（吉田憲司『文化の「発見」』1999、岩波書店、田川泉『公的記憶をめぐる博物館の政治性』2005、明石書店、など）。上記のような内外の博物館人類学の成果を基礎としながら、本研究は、博物館活動を対象に人類学的調査をおこない、タイという非西欧社会の博物館と博物館活動のモデル、およびその変容過程を明らかにしようとするという点で、ユニークな位置をしめるものと考えられる。

本研究を着想するに至った直接の契機は、平成 17・18 年度に参加した、特定領域研究『資源人類学』「生態資源の選択的利用と象徴化の過程」[班代表者：印東道子]である。この研究では、北タイの仏教寺院に大量に保存されている貝葉文書（タリポットヤシの葉を加工したものに仏教経典を記したもの）に関する物質文化と、上座部仏教の衰退、地域アイデンティティ意識の高揚、伝統文化の商品化といった社会現象との関係が明らかにされた。このとき、一部の寺院および僧侶が、周辺地域から歴史的遺物を集め収蔵・展示し、地域の伝統文化の保護・復興に中心的な役割を果たしていることが確認された。しかし西洋的なものとは異なるこうした独自の「博物館」がいかなるもので、どのような機能をもつかという点は、今後の課題として残された。

## 2. 研究の目的

本研究は、タイ国内に 1,000 程度あるといわれるコミュニティ博物館のひとつをフィールドとして、博物館活動および博物館とコミュニティの関係についての人類学的な現地調査をおこない、収集データを分析することによって、タイ固有の「博物館」という形態と、コミュニティにおけるその機能を明らかにすることを目的とする。コミュニティ博物館では、コミュニティの成員が、地域固有の知識、習慣、伝統に基づいて博物館活動をおこなっていると考えられるが、その実態はどのようなものだろうか。収集、保存、展示、教育といった全プロセスを観察の対象とし、そこでどのような分類システムや知識、価値観が作用しているのかを明らかにする。この際、西洋的な博物館のモデルないし博物館学がどの程度活動に取り入れられているのかにも着目する。また、90 年代後半以降、タイ政府が進める地方分権化政策およびコミュニティ開発運動、あるいは地域アイデンティティ意識の高揚や文化産業の発展といった社会変容のもとで、博物館活動および博物館とコミュニティの関係がどう変化しているかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

本研究は、タイのコミュニティ博物館における合計 5 カ月間の現地調査を含む 3 年間の研究計画を設定する。現地調査においては、調査者の国立民族学博物館での勤務経験（約 12 年）を活かし、調査者が博物館活動に参加しながら観察する、いわゆる参与観察を中心として、ランダムな観察やインフォーマルなインタビュー、簡単な質問票を用いたライフヒストリー調査などを組み合わせた、人類学的な調査方法を採用する。2008 年度は、主に調査地の選定と、選定したコミュニティ博物館の運営全般および展示についての集約的な現地調査に当てる。2009 年度は、同博物館において収集と保存に焦点を当てた現地調査をおこなう。2010 年度は、社会的環境としてのコミュニティの変化と博物館の関係について現地調査をおこない、これまでの調査結果を総括して、成果発表のための準備をおこなう。

2008 年度は、集約的な調査をおこなうコミュニティ博物館を設定し、博物館の概要および展示内容についての調査を実施する。調査地の選定にあたっては、調査協力者として参加するシリントーン人類学センターのパートナー・チャランパオ・コアナンタクン所長に同行していただきながら複数の候補地を訪れ、その助言を考慮して決定する。シリントーン人類学センターが協力関係を築いている 4 つのコミュニティ博物館が候補地として挙げられ、応募者の過去の調査地に近いランパーン県にある博物館を候補地として選定した。博物館の概要に関する調査では、博物館の歴史、建物の構造、空間的配置、展示形態、解説パネル、組織構造、財政状況等が調査項目となる。なお、シリントーン人類学センターの図書館を利用して、タイのコミュニティ博物館に関する資料について文献研究をおこなう。

2009 年度は、前年度に調査したコミュニティ博物館において、収集と保存に焦点を当てた現地調査をおこない、前年度の調査結果とあわせて、博物館活動の全体像を明らかにする。

収集に関する調査では、関係者のインタビュー等によって収蔵品の歴史を可能な限り調査し、それらを総合して、コレクションを構成するインフォーマルな規準について明らかにする。保存に関する調査では、収蔵品の物質的变化とそれに関わるコミュニティの伝統的な知識、さらには西洋的な保存科学の知識の影響に焦点を当てる。これらの調査には専門的な知識が必要とされるため、応募者の知識を補うために、国立民族学博物館の日高真吾准教授（専門は保存科学）に調査協力者として参加してもらおう。日高准教授は木製品とくに漆器の専門家であり、木製の仏具

や漆器が中心であるタイのコミュニティ博物館の保存についての調査協力者として適任である。

2010年度は、これまでのコミュニティ博物館の調査結果を踏まえ、母体となっているコミュニティに見られるさまざまな社会現象と、博物館とコミュニティの相互関係についての比較的長期の現地調査をおこない、最終的な成果とりまとめの準備に入る。

一方で、博物館がコミュニティの知識や経験、資源をどのように利用しているか、博物館の活動が社会の要請や需要にあわせてどのように変化するか注目し、他方で、コレクションが表象するアイデンティティや社会的価値が、コミュニティにおけるアイデンティティの形成とどう連動しているか、博物館の活動が社会にどのようなインパクトを与えているかが調査の焦点となる。後者では、コミュニティだけでなく、タイ社会の大きな変化、とりわけタイ社会内部でのコミュニティの位置づけの変化も、重要な調査項目となる。地域アイデンティティ意識の高揚と文化産業の発展は博物館活動の変動に大きな影響を与えるからである。そして、過去3年間にわたる現地調査で集めたデータおよび分析結果に基づき、成果とりまとめのための準備をおこなう。

#### 4. 研究成果

##### (1) 研究の成果

計約五カ月にわたる現地調査で明らかになったことは以下の通りである。

##### ①タイのコミュニティ博物館の概況

2008年度におこなった約一カ月間の現地調査では、タイにある主要なコミュニティ博物館の概況把握をおこなった。概況把握においては、最初にバンコクのシリントーン人類学センターを訪問し、パリッター所長およびその他研究員から、当センターのコミュニティ博物館支援活動の概況、コミュニティ博物館についての研究状況、関連文献図書の所在などについて有益な情報を得た。その後、当センターの図書館、チュラロンコーン大学図書館、タマサート大学図書館、芸術大学図書館等において関連する文献資料を収集した。

その後は、シリントーン人類学センターが研究プロジェクトを実施する2つのコミュニティ博物館と、チェンセン博物館、ムアン寺民俗博物館、さらにはバンコク西部からナコンパトム県、ラチャブリ県にかけての小規模なコミュニティ博物館をめぐり、博物館の状況や運営のありかたについて情報を収集した。特に、ランパーン県のコミュニティ博物館では、博物館の歴史、展示形態、解説パネル、さらには周辺村落の状況などについ

ての概況調査を実施した。

##### ②コミュニティ博物館における収集と保存

2009年度は、タイ国ランパーン県のライヒン寺コミュニティ博物館と、その比較対象とするためのタイ北部地域（チェンマイ県、ランパーン県、ランパーン県、プレー県）の約20の地域博物館において、主として保存と収集に焦点を当てた現地調査をおこなった。ライヒン寺コミュニティ博物館では、まず運営者に、博物館の歴史、解説パネル、組織構造、財政状況等についての聞き取りをおこなった。さらに保存科学を専門とする国立民族学博物館の日高真吾准教授（調査協力者）から協力を得て、収蔵品の保存状態と、それに関わるコミュニティの伝統的な知識、さらには文化省芸術局や地方公共団体、研究者等から保存方法についていかなる指示・教育を受けているかについて調査をおこなった。その結果、いくつかの伝統的な保存方法が現在の保存科学の水準でも効果的におこなわれていること、実施されている保存方法とコミュニティの価値観とのあいだに強い結びつきがあること等が明らかになった。さらに、国立博物館の学芸員からの聞き取り調査により、シリントーン人類学センターの実施しているコミュニティ博物館の支援プロジェクトとは別に、文化省芸術局およびそこに所属する国立博物館が地方のコミュニティ博物館が所蔵する文化財についておこなっている保存修復支援活動の実態について把握することができた。

さらに、バンコクでシリントーン人類学センターから紹介された20のコミュニティ博物館を対象に、主として収集過程に焦点を当てた聞き取り調査をおこなった。その結果、コミュニティ博物館の収集活動や保存活動は上座部仏教の信仰とそこでの仏教寺院の役割と強く結びついていることが明らかになった。これらの調査は、タイという文化的文脈のもとでの博物館における保存と収集のモデル、およびその変容過程を明らかにすることができたという点において大いに意義があった。

##### ③博物館とコミュニティの相互関係

2010年度は、博物館の活動と、その母体となっているコミュニティにみられる社会変化との関係に焦点を当てた現地調査をおこなった。これまでに明らかになったことは以下の三項目にまとめられる。

・博物館の活動は、90年代以降、北タイ各地でみられる地域文化の復興運動と結びついて展開してきており、外部に地域文化を紹介するというよりは、地域社会内部で地域のアイデンティティや連帯を醸成することに主眼が置かれている。

・地域住民がコミュニティ博物館の役割と可能性に以前より注目するようになった背景には、地域の急速な近代化と社会関係の希薄化がある。

・地域社会だけでなく、タイ社会全体の大きな変化、とりわけタイ社会内部でのコミュニティの位置づけの変化、具体的には地域アイデンティティ意識の高揚と地域主導による開発モデルの展開が博物館活動の大きな推進力になっていることが明らかになった。さらにいえば、タイのコミュニティ博物館は、仏教寺院に附置され、タイで独自に発展してきたという歴史をもつが、近年の展開は、いくつかの官公庁による開発プロジェクトの刺激のもとで展開しているということも明らかになった。

なお、現地調査の他に、次の2つの研究集会に参加したことは本研究にとっても大きな研究成果をもたらした。

2008年11月には、シリントーン人類学センターで開催された「タイの地域博物館」というシンポジウムに特別講演者として招待され、「日本の地域博物館」と題して、タイの地域博物館と日本の地域博物館の差異について発表をおこなった。この際に、数多くのタイの博物館関係者と交流し、多くの有益な情報を得られたことは、タイのコミュニティ博物館の現状を理解する上で大きく役だった。

また、2009年3月には、ハーバード大学人類学部および東南アジア研究グループ、イェンチン研究所共催のセミナーにおいて、「知識の物質化」と題して、タイのコミュニティ博物館の中心的な収蔵物になっている貝葉文書の歴史について研究発表をおこない、多くのタイをフィールドとする地域研究者および博物館人類学を専門とする研究者と意見交換をおこなうことができた。このことは、本研究の今後の発展をさらに期待させるものとなった。

## 2) 成果の位置づけとインパクト

80年代以降、文化表象の政治性が人文諸科学における主要テーマのひとつとなるなかで、博物館人類学は展示における表象論を中心として飛躍的な発展を遂げた。現地での人類学的調査結果を踏まえ、表象される元の文化と、主として先進国の博物館における、展示の表象との関係を批判的に論じてきた。これに対して本研究は、タイ社会における博物館活動そのものを文化としてとらえて人類学的な調査の対象とし、収集、保存、展示、教育のプロセス全体に焦点を当て、コミュニティの成員が知識や経験、資源を利用して、どのような博物館活動に従事しているかを研究の対象とするものである。この際、収集

と保存も、重要なタイの物質文化の一部として研究対象に含めていることは本研究の独創的な点のひとつである。保存や収集については方法論としてのみ博物館学のなかで議論されることが多く、集約的な現地調査を踏まえて、それらの背後にある文化的な概念枠組みや仮定が検討されることは、これまであまりなかった。また、本研究は、博物館内部の活動だけでなく、博物館とそれを支えるコミュニティの関係、およびその変容過程にまで視野を拡げている点で、博物館人類学のなかでは独創的なものになっていると言える。

本研究は、結果として、地域住民とともに草の根運動的に発展してきたタイのコミュニティ博物館で、どのような活動がおこなわれ、それがコミュニティでどのような役割を果たしているかを明らかにすることができた。これは、タイの博物館活動の基礎になる物質文化を明らかにするだけでなく、非西欧的な文脈において独自に発展した博物館のモデルを呈示することになるのであり、博物館とは何か、文化の表象はどうあるべきかといった博物館人類学の議論をさらに進展させるために重要な事例を提供する。また、本研究は、タイのコミュニティ博物館とコミュニティの関係、とりわけ博物館および収蔵品を通じてコミュニティがどのようなアイデンティティを表現し、構築するかを明らかにした。このことは、現在、タイで進行する地方分権化ならびに地域開発における、博物館、あるいは文化プロジェクトの可能性、重要性を確認することになっている。さらに文化人類学において、物質文化や芸術といった分野は、とりわけ文化の商品化およびアイデンティティの政治化と絡まって、近年ますます関心を高めており、本研究の成果は博物館人類学の分野にとどまらず、大衆文化の人類学的研究、とりわけ観光や文化遺産といった領域において、重要な貢献をもたらすことになるであろう。

## 3) 今後の展望

### ① 成果発表

本研究で3年間に現地で集めた現地語の文献資料は膨大であり、その分析はまだ終了していない。これを継続して進めるとともに、これまでに集めた現地調査の結果についても解析を進め、2011年度での成果とりまとめを目指している。成果発表については、まずは日本語での発表を考えているが、本研究プロジェクトにおいておこなったタイ、アメリカの研究者、実践者との研究交流をいっそう発展させるため、できればその後、英語で発表していくことを考えたい。

### ② さらなる展開

本研究はコミュニティ博物館に焦点を置いた研究であったが、そのなかで明らかになったことは、90年代後半以降にタイの農村社会が急激な近代化を経験していることと、それに呼応するように地方文化復興運動が生じてきたことであった。コミュニティ博物館の人類学的研究を今後も継続していく予定であるが、それと同時に、今度はコミュニティの文化復興運動に焦点を当てた研究をはじめようことを計画している。これに関しては、2011年度より、科学研究費補助金基盤（B）「東南アジア大陸部におけるコミュニティ運動」（研究代表者：田辺繁治）に研究分担者として参加することになったため、このなかで、本研究の研究成果をいかしつつ、コミュニティ運動に焦点を当てた研究を展開していきたい。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計1件）

平井京之介、Materializing knowledge: palm-leaf manuscript-making in Northern Thailand、ハーバード大学社会人類学セミナー、2009年3月19日、ハーバード大学イェンチン研究所。

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

平井 京之介 (KYONOSUKE HIRAI)

国立民族学博物館・民族文化研究部・准教授

研究者番号：80290922